



Christmas



サンタがやってきた

今夜は年に一度の大仕事が待っている。
世界中の子供たちにプレゼントを届けるのだ。

親の言いつけ通りに眠っている子にも
大きな靴下をベッドにつるしている子にも
もちろん、サンタを偽らない子にも
夢と小さな幸せを運んであげる。
この仕事を僕は誇りに思っている。

真夜中の仕事に休憩はない。
でも、明日の朝、目覚めたときの
子供たちの喜ぶ顔を想像すると、体が勝手に動いてしまう。

トナカイのそりで
いくつの山を超えただろう。
いくつの海を渡っただろう。

少しずつ袋が軽くなっていく。
疲れているのに、なんだかちよつと寂しくなった。

朝日が昇り始めた。
僕の仕事は終わり。
家に戻ると着替えもせずにベッドに倒れこんだ。

夜に訪れた子供たちの笑っている夢を見た。

ずいぶん眠ってしまった。
時計を取ろうと枕の先に手を伸ばすと
何かの角に指をぶつけてしまった。
体を起こして寝ほけまなこでその先を見ると
そこには。
リボンのかかった小さな箱が置いてあった。

サンタクロース

こんにちは。サンタクロースです。今回は、私の仕事についてお話ししたいと思います。え？サンタなんて居るわけがないって？ そんなことをいうのもんじゃないですね。サンタさんは実在しています。国際サンタクロース協会なんていうものもあるんです。

さて、私も、サンタクロースは、世界に180人ほどおります。一人は、長老サンタ。残り、この人のお手伝いをする、公認サンタと呼ばれる人々です。でも、なろうと思うと、それはそれは大変です。

もちろん試験がありますが、その前に、受験資格があります。

「体重が120キロ以上」

これはそれくらい厳しいかと言うと、全世界で10%以下しか居ません。ほとんどの人はここで脱落です。どうしても、と言う方は、日本だとお相撲さんにでも相談してください。きっと、いい方法を教えてくれるでしょう。私は、サンタになるまでは痩せたかったです、このままでもいいことになってちよつとうれしかったです。

さて、受験資格を得たら、試験です。

1 「英語（又は、デンマーク語）のスピーチ」

話す内容は、なんと、自国の諸問題について。観客は公認サンタ180人全員。当然、子供の夢を壊すような内容を話すと一発アウト。語学が苦手な方はここでさようなら。

2 「体力試験」

サンタクロースという仕事は、プレゼントを担いでの重労働。当然体力審査は必須になります。巨漢がサンタの格好をして激走。会場は異様な雰囲気になります。

3 「笑い声の発声」

サンタ同士は「ホッホッホ」という笑い声でコミュニケーションをとります。いや、取れないけど、取れるんです。ということで、笑い声がうまく発声できるかどうかの試験があります。しかも公認サンタ全員が審査。180人と笑いあいます。

他にもいろいろありますが（「伝説のサンタクロース朝の体操」の試験とか）これらの4日間にもわたる厳しい試験をクリアしなければなりません。倍率は、およそ60倍の超難関です。そして、毎年7月には世界サンタクロース会議なる会議も開かれます。ただ、真夏でもサンタの制服は変わりません。その格好で会議をするのです。しかも、そのときは自宅からサンタクロースの正装をしなければなりません。

日本から出て行くときなどは、はっきり言って地獄この上ないですが、この方式できちんと毎年会議に出席しないと、ライセンスが剥奪されてしまいます。厳しいです。

さて、その会議ですが、たとえば、「煙突のない家への進入経路をどうするか」と言うことを話し合います。もう、空き巣の会議とレベルがかわらないと新入りの頃は思ったものです。ほかに、「女性サンタクロースのスカートの丈の長さ」なんていうエロおやじの愚痴みたいな議題もあれば、「環境の変化に伴うトナカイの減少と保護について」なんていう生物学者でも連れて来いという議題もあります。

もちろん、12月にはプレゼントを配るという本業が待っています。

なお、日本にいらつしやる個人のお客様の場合、プレゼントは一回3万円。国際サンタクロース協会からサンタを派遣しております。

え？ 夢？ だって、こちらも商売ですから。もし、本当に子供たちに無償でプレゼントを配るようなサンタが実在したら土下座して謝りますよ。

これが、実在する現実のサンタクロースです。ごめんなさい。むしろ、居ないって言ったほうが、まだ救いがありましたね。

これはアフガニスタンの子供達へ雑貨を贈ること
で生活の手助けをしよう、難民や宗教について考え
てみようという企画です。以下のようなものを届け
ます。

文房具：鉛筆、ボールペン、クレヨンなど

玩具：縄跳び、ミニカーなど

~~~~~

मा

思い浮かびましたか？

一、動物や肌を露出している女性（顔を含む）のイラスト、また動物の名前が入っているものは避けること。

イスラム教では外出時に女性の肌の露出は禁止されているため、また豚は不浄の動物と定められているためこのような注意があります。

更に、アフガニスタンでは識字率が高くありません。雑貨内にある“dog”の文字を“豚”の意味にとつて親が子供からバックを取り上げてしまう…という事態を防ぐために文字はなるべく入っていないものを選びます。もし用意できなかった場合、例えばドラえもんが表紙のスケッチブックを送る場合は、しずかちゃんのイラストと、ドラえもん<sup>の</sup>の文字をマジックで塗りつぶします。

二、ミニカーにはゼンマイがついていない（勝手に動きださない）ものを選ぶこと

アフガニスタンには地雷が数多く埋まっています。子供達の遊び場にすら埋まっている可能性があるのです。そのような場所でゼンマイ式のミニカーを走らせた場合、手から離れて走る玩具を追いかけた子供が地雷を踏んでしまう可能性があります。

三、必要なものを過不足なく入れること。

せつかく贈り物をするのだから少し多めにいいものを……と思われるかもしれませんが。しかしそのパツク以外を受け取った子供はどう思うでしょうか？

この企画が始まった頃、届けるクレヨンの色数を指定しなかったところ、パックを受け取った子供達でけんかが起こってしまったことがあるそうです。

(今は十二色、という指定があります) なるべく多くの子供達に平等に行き渡るようにするためのきまりです。

その他にもナイキのものは避けるなどの決まりがあります。(ロゴが武器を表すため)

いかがでしたか？意外と思いつかないものでしょう？

最初にこの企画に参加したとき、前述したような注意を聞いて、自分に海外情勢についての知識がないことに驚いた記憶があります。

私が所属している団体では秋から雑貨を集め始め、クリスマス会で最終確認に入ります。

最近ではクリスマスにイスラム教の国へ贈り物をする、という行為は日本がクリスマスにお祝いをし、正月には神社に行つて、お盆にはお寺へ行くような宗教に偏りが無い国だからできることなのか、とも思っています。

この国ではクリスマスは純粹に人の幸せを祈ることのできる日です。ぜひ、遠い国にいる彼等に思いを馳せてみてください。

ドッグファイト  
Another Christmas ～聖夜の格闘戦～

「ヒュバーヨウルア  
(メリークリスマス)」

十二月二十四日 午後十一時三十七分 太平洋上空

サンタクロースの乗ったそりが

滑るように飛んでいく。

サンタ、大きなプレゼントの箱を

戦闘機に向かって投げる。

もちろんそれがただの

プレゼントであるはずもなく…

「ふう、今年は特に冷えるのー、早いとこ暖かい南半球に行きたいわい……って、わたたたた！ふう、誰じゃわしのそりに向かってバルカン砲なんか撃ってくるヤツは……って、あいつらしいのか…」

びゅん！

後方よりプロペラ戦闘機襲来。

戦闘機、逆に木っ端微塵にされる。

間一髪のとこで夜空賊は脱出。

パラシュートでひらひらと海上へ落下。

「ヒャーハッハッハ！今年もやってきたぜー今年こそ貴様を墜としてプレゼントを頂く！覚悟しやがれヒゲジジイ！」

「チックショー、来年はもっと高性能のミサイル用意してやるからなー、覚えてやがれー！」

「懲りないのーやぐうぞく夜空賊どもは。オマエさんにワシを墜とすことは無理やっちゃうに」

夜空賊、パラシュートを振りほどいて海をばちやばちや泳ぎなら去る。

「なんでいきなりエセ関西弁になるんだよ！ナメたこと言ってつと本気で木っ端微塵にすつぞコラアアアー！！」

サンタクロース、HOW HOW HOW

とサンタ特有の笑い声で笑う。

「やれやれ…ルドルフ、来るぞ。応戦用意！」

「ふう、まだまだ訓練が足らんのー連中も。さーて時間を食っちゃった。急ぐぞルドルフ！次は日本じゃ！」

夜空賊、バルカンなりミサイルなり乱射。

しかしサンタのそりはバレルロール↓ブレイク

↓急減速↓急加速の連続で全弾かわしきる。

サンタクロース、手綱をばちんと打ち鳴らし再び

そりを滑らせる。そして日本に向かい、

夜空のかなたへと飛んでいく……

「くっそー、いつも思うがどんな動力使ってやがんだあいつのそりはあー……ってあれ？……いない。どこにいやがるあいつは！」

～FIN～

サンタのそり、夜空賊の戦闘機の後ろを取る。

\*この物語はフィクションです、実際の人物、団体、行事、伝承などとは一切関係ありません

## クリスマスランナー

走る！ 走る！ 走る！ 真っ赤な帽子をばたばた揺らし、白いあごひげに汗水たらして、雪降る夜道をひた走る。クリスマスなのに、脳内では爆風スランプの「Runner」がエンドレスでリピート中だ。正直今すぐこの場で地面にぶっ倒れたいのだが、待っている子供たちがいる以上止まるわけにはいかない。荷物がだいぶ軽くなってきたのがせめてもの救いだ。残るは3軒。走れ！



町内会で、クリスマスに子供たちにプレゼントを配ろうという企画が立ち上がったのである。

私がサンタ役に抜擢されたのである。

半分ほど順調に配ったところで、車がパンクしたのである。

業者に電話したところ、来るのに3時間かかると言われたのである。

いつ子供たちが寝てしまいか分からない以上、当然、そんなに待つわけにはいかないのであった。



雪道をサンタクロースが爆走するという愉快な光景を振りまいた結果、ついに残すところ1軒となった。我ながらよくぞ頑張った。

走ってみて分かったのだが、このサンタの衣装は通気性が異常に悪い。上から下までそこら中が蒸される。さっき行った家では、汗だくの顔に無理矢理笑顔を貼付けさせてプレゼントを渡したせいか、親子ともに激しく引きつった表情をしていた。申し訳ない。最後くらいそんなことがないようにしたい。

なんとか目的地に到着し、チャイムを鳴らす。煙突から入れないのはご愛嬌だ。ものの数秒で、バタバタとにぎやかな音を立ててドアが開けられた。そこには、はじけそうなくらいの笑顔。

「わっ！ 本当だ！ 本当にサンタさんが来た！」

「ほっほっほ、メリークリスマス。ほらプレゼントだよ」

疲れているのをひた隠しながら、深く響く笑い声を上げて子供にプレゼントを手渡す。受け取った子はまるで宝物を手に入れたみたいにはしゃぎ回る。

そう、これが見たかったんだ。この溢れんばかりの無垢な笑顔が。こんな私が頑張るだけで、子供たちがこんなにも喜んでくれる。こんなにも嬉しいことがあるだろうか。あきらめずに走りきって本当によかった。また来年も、絶対にやろう。

遅れて出てきた保護者の方に軽く挨拶をして、私は車を放置した場所に向かった。さすがにこれ以上は体力の限界だ。車の中で業者を待とう。頭の中では今度は「サライ」が流れている。

子供たちの笑顔を思い出して幸せな気分になりながらそこに戻ると、車には「駐車違反」と印字された紙が一枚貼り付けられていた。

そろそろ今年もクリスマスやなあ。今年は皆どんな風に過ごす予定なん？うちにとつてクリスマスなんて別にどうでもええし……。恋人がおったり、家に家族がおるなら話は変わっけど、恋人もおらんし一人暮らしやから普通の日と変わらんのやし。

ん？実家に帰って家族と過せばええってか？26日に予定が入つとるしできんのやん。そもそもクリスマスなんてキリストの誕生を祝うためのもんやろ？うちは浄土真宗本願寺派なんやしそんな知らんわ。そんなやし日本らしさとかが無くなつてくन्छやうん？別に日本人がクリスマスを楽しんだらダメやなんて言つてないし。クリスマスなんてどうでもいいって思ったらそんな風に考えんけ？そう考えるのってうちだけじゃないやろ？

まあ、何か起こるかもとかいう甘い期待で23日以降バイト休みにしたけど多分意味ないやろうなあ……。久々に地元の友達と飲みに行くか。

えっ？Fに彼女が出来た？？へえ……。よかったじ。お幸せになあ。……。もう……。嫌やし。さすがにクリスマスイブに前後半通しでバイト入れるんは痛いしなあ。どうすつかな……。合コンとかあんま乗り気やないし……。

ん？Hからメール？「合コン行かんか？」……。言ってる端からこれやん。乗り気やないって言うとるやんか……。

考えた結果は……

「いいよ☆行こうぜ！」

## 『クリスマス』

今年もこの季節がやってきた。街は美しく輝くイルミネーションで彩られ、ある者は恋人と愛を語らい、ある者は来年こそはと闘志を燃やす。

ところで皆さんはクリスマスの起源を知っているだろうか。キリスト教と関係があると思うだろうが、その考えが全く正しいとは言えない。

「クリスマス」という言葉は「キリストの降誕祭」という意味であるが、もともとキリスト教では十二月二十五日と日付が決められていた訳ではなく、一月や八月にやることもあった。

では、現在のクリスマスは一体何が起源となっているのだろうか。

その答は時期に関係している。十二月の下旬といえば節気で言うところ冬至に当たる。そう、クリスマスとはもともと、冬至を祝って行われた祭りなのである。

なぜ冬至という節気が祝われたのか、それを解く鍵は日照時間である。秋から冬にかけてだんだんと日は短くなる。今でこそこの現象は地軸の傾きからきちんと説明がなされ、周知の事実となっているが、大昔の人々にそのような知識は無い。このまま日が短くなり、世界はやがて暗黒に包まれてしまうのではと誰もが思う。ところが冬至を境にして、日はまた少しずつ伸びていく。そして暖かく生命に溢れた季節がまた巡ってくるのだ。このことは、当時の人々にしてみれば歓喜に値する出来事に違いない。

実際、冬至を祝う習慣は世界のあちこちに昔からあったようだ。例えばローマでは、冬至の前後は公務も商売も学校も全部休みで、一週間ぶつ続けで祝っていたらしい。これは数あるローマの祭りの中でも最もめでたく、盛んなものだったようだ。

要するに、クリスマスという行事は冬至を祝うもので、キリストの生誕は名目上のことに過ぎないのだ。

大昔の人々は、自然への畏敬の念や、自分たちが生きていることの喜びを感じてクリスマスを祝った。これは、今の私たちも感じるべきことではないか。

今年のクリスマス、あなたはどうか過ごしますか。

## クリスマス之夜

今日はクリスマスだ。僕は習い事の習字を終え、パラパラと降る雪の中、家路へと着いた。最近の友達との話の話題は、もっぱら、サンタにプレゼントに何をもらうかとか、またサンタは本当にいるのかどうかということだ。今年はサッカーのスパイクをサンタに頼んだ。今履いているのは、少し小さく丁度履き替える時期だからだ。また僕はサンタを一応信じている。小学四年生になってサンタを信じている人も少なくなってきた、時々友達にも馬鹿にされたりするけれども、やっぱりサンタはいるんじゃないか？と僕は思い、そしてそうであることを心の内側で望んでいる。

家に着くと、家族がみんなで寿司を食べていた。クリスマスなのに寿司なの？と思ったが、ごちそうには変わらないと思い、僕も寿司を食べ始めた。

食事を終え、テレビをそれとなく見ていると、母親に「早く寝なさい！サンタさん来ないわよ！」と言われたので、だらだらと寝る支度をして、ベッドに入り、気持ちの良い睡魔に出会い、僕は深い眠りについた。

真夜中、部屋の外からの物音で目を覚ました。眠たい頭の中で、「なんだろう？今の音は」と考えていると、脳裏に、「サンタ？」という考えが思い浮かんだ。サンタに会ってみたい、サンタがいるということに確信を持ちたいという一心で、部屋を静かに出て、家の中を探し始めた。しかし、いつもプレゼントが置かれていた玄関や、リビング、台所と探したが、サンタらしき人物を見つけないことはできなかった。

家のほとんどの箇所を探したあと、やっぱりサンタなんていないのかなと気を落としていると、ふと両親の寝室の前を通りかかった。まだここは探していないなかつたなと思いつながら、そっと部屋に入るとそこには両親がベッドの上で裸で抱き合っていた。僕はあつけにとられて、何が悪いのかわからないのに「ごめんなさい」と謝り、自分の部屋へと急いで帰った。

次の朝、いつもと同じように、サンタは来てくれていて、プレゼントを置いてってくれていたけれど、僕はそれからクリスマスの夜に目を覚まして、サンタなど探さないようにしている。

「わたしはサンタクロースであります」

## 四〇年後のプレゼント

俺はとある一流企業ではたらくサラリーマンである。

だが、ここ数十年たいした昇進もなく、ただ窓際に座って部下の書類に目を通しては判子を押すだけの毎日であった。もはや何の面白みもない、単調な流れ作業。そんな仕事を淡々とこなしていた。部下と交わす言葉に、仕事用語以外の日本語を用いることはない。

家族との会話もないし、正直プライベートルートに関して、俺に構う人間なんてほとんどいなかった。

しかし、シマヅさんという清掃係だけは俺の心の支えであった。彼はいささか変人ではあったが、毎晩遅くまでオフィスに残って疲れた俺に、昔の面白い話を聞かせてくれるし、その上俺の愚痴をも聞いてくれる、心優しい老人であった。

そんな彼が今日、突然口にしたのがこの言葉であった。

「…は？」

「だから、わたしはサンタクロースであります」

「シマヅさん、悪いんだけど冗談はやめてくれるかな。今日がクリスマス・イヴとはいえ」

「では、これは君の頼んだプレゼントではありませんか？」

そう言ってシマヅさんが差し出したの是一台の高級カメラ。なんだ、これ。

「なんでシマヅさんがこれを俺に？」

「だから言いましたでしょ。わたしはサンタクロースであります。君が小学生のころ、私に手紙を出したでしょ」

そう言って俺に、一枚の黄ばんだ手紙を渡してくれた。俺は全てを思い出した。

サンタさんへ

今年はカメラをください。ニコンのいちがんレフというのがいいそうです。

ぼくはしょうらい大きくなったら、カメラマンになりたいとおもいます。世界をとびまわって、いろんなすてきなものをとってそれをみんなにみせたいのです。

お父さんはそんなのはむりだサラリーマンになりなさいというけれどぼくはそんなものになりたくない。カメラがあればなんでもとれます。いつかサンタさんもとりたいた。だからおねがいします。今年はぜったいカメラをください。

こんな素朴な俺の夢も、あわただしい受験戦争や出世競争に流されて、とうの昔に忘れ去られていた。

「遅くなつたです。メリー・クリスマス」  
俺は涙を流さずにはいられなかった。

煌びやかなイルミネーション。緑と赤のモール。スノー  
スプレーで描かれた可愛らしい雪だるま。微かに聞こえる  
明るいメロディー。

いつもより激しい人通りの間を縫うようにして、大通り  
を駅へと向かう。コートもなく、身を切るような寒さの中、  
ただ駅だけを目指して走り続ける。

残念ながら、俺には、デコレーションされた街をゆつ  
りと眺めている余裕など無かった。

## 聖夜

駅構内に入ると、人の数は大通りの比ではなかった。思  
うように前に進めず、仰ぐように天井から下がる時計を見  
上げる。舌打ち。職場を出てからも二十分も経っていた。

俺は、普段なら駅から徒歩十分の、スーパーマーケット  
に勤めている。一階・食料品売り場の主任だ。クリスマス・  
イヴという、一年の中でも特に売り上げの伸びる日の、し  
かも七時前に職場を離れるなど例年では有り得ないことだ  
が、今年は仕方が無い。

きつかけは六時すぎに入った一本の電話だった。

その時俺は、各売り場の状況を見て回っていた。店内は  
大賑わいで、開店時、うす高く積まれていたチキンレッグ  
も底を尽き始め、あらゆる売り場で品切れが始めていた。  
店内をくまなく巡り、目で売り切れたものを確認し、次々  
と手元のレシーバーで正面入り口に伝えていく。

慌てたようなスタッフの声が俺のレシーバーに飛び込ん  
できたのは、そんな時だった。

駆けつけ、スタッフルームに入ると、受話器片手に真剣  
な顔をする後輩の姿。一言札を言って受話器を受け取る。

一息をつき、保留を解除した。

「お電話変わりました、松田です」

いつか来ることはわかっていたその電話。しかし、実際  
その時になると、やはり声が震えた。

行列の出来ている改札をなんとか抜け、強引に階段を駆け  
上がる。と同時に、ホームに電車が滑り込んできた。急  
行だ、運が良い。窓が曇るほど混雑した車内に、無理やり  
体を捻じり込む。俺が押しのけたスーツ姿の若いサラリー  
マンがよろけ、あからさまに咳払いをした。

「ごめんな、でも今はそれどころじゃないんだ。

一秒でも早く病院へ——大切な人の下へ。

山場は今夜になりそうだと、昨日から医者が言っていた。

だから、出来るなら今日はずっと一緒に居てあげたかった。  
けれど、どうしてもイヴに休むわけにはいかなかった。

今朝、病院を出るとき、『すまない』と謝る俺に、アイツ  
は優しく微笑んでくれた。声には隠し切れない痛みが滲ん  
でいたが、それでも『いいから。いつてらっしゃい』と送  
り出してくれた。

電話を切った後、俺はしばらくどうすれば良いのかわか  
らなかった。病院でアイツが苦しんでいる。もちろん、今  
すぐにでも飛んでいきたい。けれど、俺が抜けて売り場が  
混乱しないだろうか。残りのスタッフだけで、今夜を乗り  
切れるだろうか。

不意に肩を叩かれた。振り返ると、入社からずっと面倒  
を見ていた後輩……副主任の田辺が居た。

「僕たちに任せてください。あと四時間、絶対回し切つ  
てみせますから」

何を生意気な。そう思った。けれど、口からは、ただぼ  
つりと感謝の言葉だけが漏れ——気がつけば俺は走り出し  
ていた。

病院は、駅から程近い。電車を降りて走り、数分で辿り  
着いた。自動ドアの手前で立ち止まり、乱れた息を整える。

受付で名前を言い、アイツの居る場所を尋ねる。対応し  
た看護師は、名前を聞くなり立ち上がり、『こちらです』と  
走り始めた。いくつかの角を曲がった後、彼女はある一室  
の前で立ち止まり、その部屋の扉を開く。

部屋の中は相当緊迫していた。数人の看護師がアイツの  
肩を叩き、必死に何事か呼びかけている。案内してくれた  
看護師に言われ、俺はアイツの傍に歩み寄った。俺の存在  
に気付いた一人が場所を開け、手を握るよう促した。

もう意識もあやふやなのだろうか。アイツの瞳は今にも  
閉じてしまいうさだった。それでも、その瞳はしっかりと  
俺の姿を捉え、いつものように優しく微笑んでくれた。

「大丈夫なの、お店」

途切れ途切れの声で、まだそんなことを気にしている。  
自然と握る手に力が籠る。涙が溢れそうになる。

「大丈夫だ、気にするな」

声が小さく震える。まだだ。まだ泣くには早い。今は、  
最後までコイツを支える。それが俺の役目だろう。

だから俺は、唇を噛み、涙を堪えて、『頑張れ』と言い続  
けた。声が枯れるまで、最後まで、何度も、何度も。

数十分後、分娩室に元気な産声が響き渡った。